

しの笛を吹く

藤原由紀子

2年ほど前、体調を崩し病院通いをするようになった。あるとき長い待ち時間に、病院付属のカルチャーセンターの紹介を何げなく眺めていると、書道やコーラス講座の並びに、和服に横笛の女性の写真があり「しの笛を吹いてみませんか」という言葉にドキッとしました。

関節リウマチの診断を受け、指が不自由になるかもしれないというのに、なぜかすぐにでも始めてみたくなった。

短期間でもよいから習ってみようと、すぐカルチャーセンターで申し込みをした。講座に出席してみると、驚いたことに初心者クラスは私一人だった。

いちばんはじめは腹式呼吸の練習からだった。しの笛を横向きに構え、唇を細く開き吹くのだが、かすかな息でもしつかり音が出せるようにするのが難しかった。一対一での練習に緊張したが、呼吸のコントロールで、音色が微妙に変化することを、間近で体験できたことはありがたかった。

短期間で笛に慣れ、手指の痛みもあまり気にならなくなってきた。2年前に夫に続いて母も亡くなった。医師からはその時のストレスが病因かもしれないと言われた。痛くても身体や指は動かしただ方が良いという指導も受け、笛を吹くことはストレス解消にもなりそうだった。

しの笛は丁寧な講師の指導を受け、簡単な曲がすぐ吹けるようになった。もつと若い時に始めればよかったとも思ったが、繊細な音

色を要求される楽器なので、人生の機微が分かるようになったこの時期で良かったのではと言われ、納得した。

3カ月たった頃「もう大丈夫じゃないですか」と講師から経験者クラスへの編入を提案された。そこは年齢もさまざま、しの笛歴数年から10年以上というベテラン達ばかりだった。笛好きの人達との交流は楽しかった。

さらに半年余りたち、年に一度の大きな発表会にも出てみませんか誘われた。

しの笛は基本一人で奏でるので、一人ずつ違う曲を吹くことになる。まだ習い始めて1年もたっていないので自信も無かったが、思い切って参加した。

他の教室の何十人も演奏を聞き、さらにしの笛が好きになった。発表会の最後に、講師が十数分の曲を演奏した。初めて聞く曲だったが「しの笛は亡き人を偲（しの）ぶのに一番ふさわしい楽器です」という言葉と共に、その切ないメロディに強く胸打たれた。練習を重ね、その曲を吹けるようになりたいと切に思った。いまは指の痛みもかなり回復した。

作者 藤原由紀子

題名 しの笛を吹く

山陽新聞夕刊エッセー

2019.09.19 掲載